

論文要旨

学位論文題目 日中接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション方略の研究
氏名 方 穎琳

本論文は、日本語を媒介言語とする接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション方略（Communication Strategies, 以下「CS」）の実態を解明し、中国人学習者を対象とした日本語会話教育への示唆を得ることを目的とした。応用言語学と社会言語学の視点から分析することを通じて、日本語習熟度が異なる学習者が進行中のコミュニケーションで遭遇する意味伝達の問題の特徴、問題を修復するための CS の特徴の一部を解明した。さらに、効果的な CS 使用のあり方を提示し、日本で学習する経験のない中国人学習者を対象に明示的な CS 指導を試み、その有効性を確認した。

論文は、8つの章（5つの研究）で構成される。第1章の序章では、第二言語（以下 L2）学習者が接触場面でコミュニケーションする時の現状を述べ、中国人日本語学習者の CS 使用に注目することの意義を論じた。

第2章では、まず、L2 言語話者の中間言語知識の発達特徴を踏まえ、その上で、L2 習得における CS 研究の必要性を述べた。次に、L2 学習者の伝達能力における方略的能力の役割とその役割を体系的に解明した CS の定義および分類方法の理論的な研究を紹介し、1) 話者間の相互作用、2) CS が表現する言語形態（具体的な言語および非言語行動）、3) 話者が意図する概念についての処理、の3者を総合的に取り入れた研究の観点が必要であることを論じた上で、本研究の立場を明確にした。さらに、L2 習熟度要因と CS 使用の関係に注目した実証研究から得られた知見と残された課題をまとめ、本研究の課題を設定した。

第3章では、分析方法、データ、会話協力者の属性、分析の対象と単位を提示した。

第4章から第6章で、実際の接触場面の2者間／初対面／自由会話（22組）に基づき、学習者が使用した CS の実態を探るための実証研究を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

研究 I から、学習者が進行中のコミュニケーションで遭遇する意味伝達の問題の特徴について、1) 習熟度の向上に伴い、意味伝達の問題の総数が減少する、2) 習熟度に関わらず、「発話産出の問題」が最も多く現れ、メッセージの成立及び伝達はいずれの発達段階の学習者にとっても困難が生じやすい、3) 理解と産出のどちらの側面でも、語彙的知識の不足・欠陥に起因する問題が多い、といったことが明らかになった。

研究 II、III から、学習者が意味伝達の問題を修復するために行った調整について、習熟度に関わらず、理解の問題と発話産出の問題に遭遇した際に、学習者は単純調整と複合調

整を両方向う傾向にあることが明らかになった。

単純調整と複合調整のそれぞれの過程で使用された CS の特徴についてまとめると、まず、単純調整では、習熟度に関わらず、学習者は問題解決の時間を確保するために達成方略よりも達成促進方略を多く使用する傾向が見られた。次に、習熟度が上がるにつれ、理解の問題を解決するための CS の使用頻度には変化が現れず、発話産出の問題を解決するための CS のうち、「自己解決型・コード」と「共同解決型・協力要請」の使用頻度が有意に減少する特徴が見られ、CS の使用頻度は L2 習熟度によって制約される可能性があることが示唆された。一方、複合調整では、1) 学習者による初めての調整（初回目の CS 使用）に対して、母語話者は学習者の習熟度に配慮し、「会話促進型」の姿勢で問題修復に臨む、2) 母語話者の調整を受けていずれの習熟度の学習者も CS を用いて再調整を行う傾向が強く、3) 再調整においては、いずれの習熟度の学習者も意味伝達の問題に応じて、「共同解決型・理解促進」と「自己解決型・概念」を多く使用する、といった特徴が見られた。

研究Ⅳから、CS 使用の効率性は L2 習熟度要因より、CS の性質によって制約される可能性があることが示唆された。そして、習熟度に関わらず、1) 理解の問題を解決する際に、会話相手に依存せず、情報量が十分且つ明確な「聞き返し」の使用、2) 発話産出の問題を解決する際に、文法や語彙の発音への調整のみならず、L2 に基づく CS、特に言及する対象物の概念的特徴に注目した「自己解決型・概念」CS の使用、3) 習熟度の高い学習者であっても会話相手の理解度を押し量りながら常に進行中の談話の展開を見極めること、といった 3 点が効果的な CS 使用のあり方として示唆された。

第 7 章の研究Ⅴでは、中国における日本語教育の状況と目標を吟味し、以上の研究Ⅰから研究Ⅳまでに明らかにされたことを踏まえ、中国で日本語を学習する中国人学習者（26 名）を対象に CS 指導の実践を試みた。CS 指導により、指導した 5 項目の CS のいずれにおいても量的変化（CS 使用数）、質的变化（発話の内容）が観察され、特に習熟度の低い学習者のほうでは明らかな効果が見られた。また、習熟度に関わらず、学習者は CS の機能、役割についての認識が深まり、タスクを行う自信が増え、理解及び産出の両方においての CS の有効性について体験できたという結果が得られ、実践の意義が確認できた。

以上の結果から、中国人日本語学習者が接触場面で生じた意味伝達の問題を解決するために使用した CS の特徴の一部が明らかになった。本論文は「理論研究→実態調査→現場指導」という観点から研究を組み立て日本語学習者の CS 使用の特徴を分析したことに意義があったと思われる。また、本論文の結果に基づき、話者間の相互作用を視野に入れた問題解決の様態（調整タイプ）を全面的に把握し、CS そのものの性質と L2 習熟度が CS 使用に及ぼす影響を熟考した上で CS の指導法を検討する必要があることは今後の L2 習得とその教育における CS 研究に与える示唆として考えられる。